古田史学の会・東海　　平成29年

東 海 の 古 代

第199号　2017年3月

会長　：　竹内　強　　副会長・発行　：　林　伸禧
編集　：　石田敬一　　投稿先アドレス：　furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp
ＨＰ　：　http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai

『房総叢書』から見えるもの

瀬戸市　　林　伸禧

１　大友皇子に関する伝承

千葉県の地誌『房総叢書』*1には、望陀郡久留里領の田原神社（現・千葉県君津市俵田　白山神社）の沿革に大友皇子の墓所があるとの伝承がある。（別紙１参照）

社伝によれば、壬申の乱で敗れた大友皇子は、この地に逃げ自刃したとされ、その後に社殿が造営されたという。

また、愛知県岡崎市には大友皇子が壬申の乱で逃れて住まいにしたという玉泉寺（西大友町）や弘文天皇（大友皇子）を御祭神とする大友天神社（西大友町）などがある。（別紙２参照）

２　『房総叢書』における古代逸年号

この『房総叢書』に、大友皇子と古代逸年号に関して興味ある記述があったので紹介する。

次の２本の記事がある。

① 年代記を案ずるに、大友皇子瀬田橋に縊死は、天智帝白鳳元年五月なり。　（『房総叢書』第６巻　218頁）

② 御體（※大友皇子）を石の櫃根に入れて此山の絶頂に約め奉るなり。故に此流を小櫃の柵と申す也。頃は白鳳十四年九月廿九日の御勧請なり。十二ケ村を氏子に寄せさせ給ひ、毎年九月廿九日祭禮と定むるなり。

（『房総叢書』第６巻　220頁）

①の記事について

書紀では、天武元年（壬申）七月条に次のとおり記述され、大友皇子は天武元年七月二十三日に自決したとされる。

壬子（２３日）　男依等 斬 近江将犬養連五十君 及谷直塩手 於粟津市 於是 大友皇子 走無所入 及還隠山前以自縊焉

『房総叢書』では「天智帝白鳳元年」から天智天皇の治世は11年としており、これは『二中歴』人代歴の記事にある

天智十一載舒明太子　天武十四世（四十）天智同母弟

の天智天皇の治世11年と一致する。なお、細字の「四十」は第40代天皇を表す。

②の記事について

「白鳳十四年九月廿九日」は、年代記（不詳）から所引きされており、それに従うと、『二中歴』では、①から天武天皇の崩御は天武十四年（白鳳十五年）であるので、天武天皇の崩御後に大友皇子の墓を勧請したとすれば、１年のずれが生じる。

また、「天智帝白鳳元年」は「天武帝白鳳元年」の誤りとも考えられる。

そこで、①②及び年代記類から整合を図ると、次のような年表が考えられる。

*1『房総叢書』：千葉県（下総・上総・安房）関連の古文書・記録などを集成した叢書。
紀元二千六百年（1940年、昭和15年）を記念し発行された。複刻版が出版されている。

西　暦		天皇治世		古代逸年号		備　考
年数	干支	日本書紀	二中歴	房総叢書	訂正案	
672	壬申	天武元	天智11	白鳳元	朱雀元	大友薨
673	癸酉	2	天武元	2	白鳳元	天武即位
674	甲戌	3	2	3	2	
∫		∫		∫		
685	乙酉	14	13	14	13	
686	丙戌	15	14	15	14	天武崩 大友墓勧請

※　天武紀の15年間を記述した年代記類での古代逸年号には、概略次のような種類がある。
①朱雀１年、白鳳１４年
増修和漢年代記（異説）
②朱雀１年、白鳳１３年、朱鳥１年
簾中抄、扶桑略記、如是院年代記（細字）
③白鳳１４年、朱鳥１年
指掌和漢合運図、大成年代廣記

３　古墳の遺物

『房総叢書』に次の記事（別紙３参照）がある。

寺（※三明寺）の東に塚の越と云う處あり。古墳と覚えし所あり。其北の方の墳より、文化丁卯（※1807年、江戸幕府11代将軍 家斉の時代）**の春、鏡・劔・曲玉という物掘り出せり。**

（『房総叢書』第６巻　168頁）

千葉県夷隅郡大多喜町での伝承「一品親王（いっぽんしんのう）と鶴姫」によると、上総地方を治めるために京から来た一品親王（※皇親に対して最も高い一品を与えられた親王、氏名不詳）は、鶴姫との祝言の日に都の使者により暗殺された。その後、一品親王の菩提を弔うため、鶴姫は尼になり「三明寺」（現・宝聚院）を建てたとされる。

「鏡・劔・曲玉」は、三種の神器（鏡・玉・剣）と考えられ、近くには一品親王の石碑墓がある。また、前段には次のとおり記されている。

里人また曰く、寺を御所といふ。後を螢ケ谷といひ、前を梅の木堀といふ。寺の東の畑を御所畑と今に云ひ傳ふと。

（『房総叢書』第６巻　168頁）

三種の神器を有する古墳と、一品親王との関連性や大友皇子の墓所とされる田原神社との関係は不明ではあるが、この記事の「御所」等から、一品親王は、この地域の王と考えられるとともに、大友皇子とのつながりに興味が湧くところである。

美濃国からみた壬申の乱

一宮市　畑田寿一

１　はじめ

壬申の乱については『日本書紀』に詳しい記載があるが、細部については疑問点が多いため、諸説が多く未だ決着がついていない。

しかし、近年発掘調査などが進み、鍵となる場所の比定が進んできた。

(1)　大津京

錦織（西大津）から内裏南門の遺跡が発見されほぼ決定。

(2)　浄御原宮

木簡などから飛鳥板葺宮にほぼ決定。

(3)　湯沐邑

岐阜県揖斐郡池田町願成寺遺跡を中心とする地域が最有力。

今回は、最新の情報を基に美濃国の民からみた壬申の乱を追ってみたい。

２　天智天皇崩御の時の朝鮮半島の情勢

663年倭国は九州勢を中心とした白村江の戦いに大敗を喫して朝鮮半島での拠点を失った。この時、新羅は唐と組み朝鮮半島の制覇を企ててきたが、その後、唐の戦略を知り、670年頃から高句麗との連合を目指し、唐への対立姿勢を顕著化し始めた。

一方、唐は百済の復興を阻止するため、百済の残留勢力を倭国に押し付けるとともに新羅制圧のため、倭国に参戦を迫った。

３　郭務宗の来日目的と賠償額

朝鮮半島情勢に伴い、唐からは矢継ぎ速やに特史が来日した。来日の目的を記述した記録は無いが前述の状況から朝鮮への出兵要請であろう。倭国はそのたびにおそらく賠償金を支払って対処してきた。

賠償額は明確でないが最後の来日の場合には、鎧兜の他、絹布1,673匹、布2,852端、綿666斤を支払った。この量は10万人規模の邑から得られる

「調」にあたり、大宰府の金蔵は空になってしまったと思われる。

しかも唐の要求は次第にエスカレートして、いつ占領が起きてもおかしくない状態になってきた。

来日期間	来日者	人数
天智天皇3年5月～12月	郭務悰ら	？
天智天皇4年9月～12月	劉徳高、百済禰軍ら	254名
天智天皇6年11月	司馬法聡ら	？
天智天皇8年（10年と重複？）	郭務悰ら	2000名
天智天皇10年1月	李守真ら	？
天智天皇10年11月～翌年5月	郭務悰、沙宅孫登ら	2000名

4　国内情勢と地方の豪族の不安

当時の国内情勢を知るには、天智天皇崩御の時に流行ったといわれている童謡を分析する必要がある。次の３つの童謡が『日本書紀』に記載されている。

①美曳之弩能　曳之弩能阿喩　阿喩舉曾播施麻倍母曳岐　愛倶流之衞　奈疑能母騰　制利能母騰　阿例播倶流之衞

み吉野の鮎は川の中の石の側にいるものだが、私はああ苦しい、水葱（みずあおい）の下、芹の下にいてああ苦しい。

→　吉野の大海人皇子の心境を謡ったもの。

②　於彌能古能　野陛能比母騰倶　比騰陛多　爾伊麻拕藤柯泥波　美古能比母騰矩

臣下である子が八重の紐を解く。私が一重も解かないのに、御子はもう紐を解いてしまった。

→　大海人皇子側の戦争準備ができてしまったことを謡ったもの。

③　阿箇悟馬能　以喩企波々箇屢　麻矩儒播　羅奈爾能都底舉騰　多拕尼之曳鷄武

早く走るという赤い馬が行くのも嫌がる葛の原っぱ。その葛の原っぱでなかなか進まないように、伝言が伝わらない。直接、言ったらいいのに。

→　紛争の原因が誤解や行き違いによるものとの世間の認識を示すもの。

通説では、いずれも大友皇子と大海人皇子との関係を謡ったものされているが、これを民の気持ちを謡ったものと考えると次の意味になる。

① 吉野の鮎（大海人皇子）は清流に住んでいるが、鮒や泥鰌（民）は水葱や芹の下にいて不安だ。（この場合、水葱や芹が誰を指すのか判明すれば事態がより明確になるが、通説がない。）

② 御子（大友皇子）は民の気持ちを無視して一方的に事を運ぼうとしている。

③ どうか民の声を吸い上げて、この国難を切り拓く道を示して欲しい。

唐の参戦要求が日増しに強くなる中で、「参戦やむなし」とする天智天皇派と「何とかして参戦は避けたい」とする大海人皇子派との葛藤があった。一方、地方豪族は先の白村江の大敗を見ているので戦いは是が非でも避けたかった。

分裂は決定的な状態になっていたが、③を見ると未だ一縷の望みを期待していた様子が伺われる。

5　美濃の湯沐邑の歴史と大海人皇子との関係

先述のように、以前、安八磨郡としか分かっていなかった湯沐邑が近年の研究結果により、岐阜県揖斐郡池田町願成寺付近であることがほぼ確定的となった。

付近には、壬生部、春日部、伊福部など皇室関係の領地とみられる場所があり、６世紀中頃に勢力を持っていた和珥氏の流れをくむものと考えられている。

日本書紀によると、大海人皇子は天智天皇の弟君として東宮（皇太子と同格）として処遇されており、美濃の湯沐邑を私有していたと思われる。

更に、大海人皇子は村国男依（各務原市）、身毛広（武儀郡）などを舎人としており、美濃一帯に影響力を持っていた。

6　日本書紀、続日本記が描く壬申の乱と史書としての矛盾点

日本書紀では、天智天皇の後継者の大友皇子側

が吉野に隠遁してる大海人皇子の討伐の動きを察した大海人皇子が止むを得ず立ち上がり、これに地方の豪族が賛同した形になっているが、前述の童謡を見る限りもっと以前に戦いの準備がされていた。

日本書紀の記述は多分にドラマ仕立てになっており、不破道に進む際に強行軍が予想される中で足手まといの女性を同行させたり、行く先々で同調した地方豪族がタイミングよく合流したり、不破道を封鎖した総大将の村国男依が現場を離れて報告に来るなど、行軍行程や情報のやりとりなど記述を史書とみると首をかしげる部分は多い。しかし、経過の全体を見る限りほぼ正しいのではないか。

天智天皇側が吉備国守（ママ）当摩公広嶋を殺してまで乱に参戦しようとしたが、結局、難波付近の直参の氏族しか集められなかった事実や、大和王朝設立以来友好関係があり、政権争いに一度も参加してこなかった美濃、尾張の氏族が立ち上がった事実は、白村江に参戦した九州の惨状を見るにつれ、次は我々が朝鮮半島に行かされるとの思いが強く、如何に厭戦気運が高かったかを示しており、正しい記述であろう。

戦闘は双方３万人規模が戦ったとされているが、戦場とされている場所は狭く、飛鳥の攻防以外は大海人皇子側の一方的勝利に終わっているので、美濃勢を中心とした局部的な戦闘であったと考えられる。

７　戦いが大和で行われた傍証

戦いは実質2ヵ月程度で終わっており、飛鳥の浄御原宮に戻るまでに4か月も掛かっていないことから、戦いは大和で行われたことを強く印象つけている。

また、飛鳥のことを「倭京」と呼んでいることから九州での出来事とする説もあるが、当時の資料に「大倭国正税帳」があるように、「ヤマト」を「倭」の文字で表わしていたので、九州の地に限定できない。

壬申の乱後、東宮への湯沐は廃止になり、代わって費用支給の東宮雑用料になったことや、乱の後、不破関、鈴鹿関、愛発（あらち）関の三関が設けられ、政権交代時には遮断されるようになったことは、日本の東側地方勢力が侮れない力を持っていることを中央政権が自覚した結果であろう。

８　尾張、美濃関係者のその後と贈位褒賞

この乱では大海人皇子はこれ以上の混乱を避けるため大津宮に入らず、高市王子に終戦処理を任せると鈴鹿を越えて飛鳥に入り、浄御原宮を建てて宮を移した。

壬申の乱は諸説が乱立しているが、その中で最も確実な情報は没後の贈位であろう。

贈位には必ず子孫がおり、同僚の子孫もいることから事実に基づく公平さが要求される。没後に贈位を受けた者は20名程度いるが、その内、尾張・美濃関係者は次の７名である。

関係者	没後の贈位	活躍の概要
尾張大隅	従五位上	野上の私邸を行宮として提供 尾張軍の実質最高責任者
村国男依	外小紫	湯沐邑への連絡、不破道の封鎖、中央軍総大将として活躍
物部雄君	内大紫	大友軍の情報を提供 尾張、美濃の物部を取りまとめる
多品治	直広壱	湯沐令として活躍。 たら野（伊賀）を封鎖した
和珥部君手	直広壱	湯沐邑への連絡、 中央軍の一員として活躍
身毛広	不明	湯沐邑への連絡、 中央軍の一員として活躍
尾張馬身	小錦下	活躍状況不明。 続日本紀のみに記述あり

多品治を除いて、いずれも乱の後、日本書紀に活躍の記録はなく、故郷に帰ったのではなかろうか。

開戦当初、尾張から2万の軍隊を率いて来たが何の活躍もせず、なぞの自殺をした尾張の国司**小子部鉏鉤**の最後を憐れんで村人が小さな祠を建てた。尾張国府の近くにある浅井神社（式内社）である。**村国男依**は郷土の英雄として現在も村国神社に祭られている。身毛広の一族は現在の関市近郊に弥勒寺を建立した。仲間を弔う目的であったであろう。

寺は火災により焼失して現在は史跡しか残っていないが、小規模ながら正倉院を持つ立派な寺院であった。

不思議なのは尾張出身者で、最大の功労者である**尾張大隅**は持統天皇の代に贈位を受けているので、その時代まで生存していたのではないか。**和珥部君手**は美濃出身説と尾張（知多）出身説があり、乱の手記「和珥部臣君手紀」を表したことが知られているが詳細は不明である。**尾張馬身**に至っては乱後86年経ってから遺族の請求により贈位を受けるほど影が薄かった。その他に尾張出身者が見られないのは尾張軍が前面に立って戦わなかったのではないか。

最後に**物部麻呂**（石上麻呂）について述べたい。物部麻呂は大友側に付き、大友皇子の最後を見届けた数少ない臣であったが、なぜか許され、５年後には遣新羅使に、最後は左大臣まで昇り詰めた。状況が決定的に不利になり多くの家臣が逃げ出す中、最後まで付き添ったことは臣として取るべき道であることを天下に示し、旧勢力を牽制する目的での登用であろう。

９　中国との交渉担当者と乱の諸説

諸説が発生する要因は、中国の郭務宗との交渉をしていた責任者は誰かが明らかでない点にある。九州と大和の距離は、駅伝による場合は片道5日、人の移動には２０日以上掛かった時代であるので、交渉の打ち合わせのために人が動くことはなく、最終結果の確認が精一杯であった。

筑紫での交渉責任者として考えられるケースは、①筑紫宰（大宰総領）、②天智天皇、③天智天皇と大友皇子、④天智天皇、大友皇子と大海人皇子、に分けられる。

①は日本書紀が採る説で、この場合壬申の乱は大和で起きたことになる。②の場合も大友皇子と大海人皇子は大和にいたことになるので舞台は大和になる。

③の場合には大海人皇子は戦いのために九州まで出かけることになる。

④の場合も九州が舞台になる。最近の発掘結果では大和舞台説がより有力になりつつあるが、いずれの説も決定的な証拠に欠けており、今後の発掘などに期待が掛かる。

神武天皇と崇神天皇は同一人物

一宮市　竹嶌正雄

Ⅰ．はじめに

本会報誌の2017年２月号掲載の「ハツクニシラス天皇（スメラミコト）の考察」により神武天皇と崇神天皇は同一であるとした。このことを神武天皇の東征と崇神天皇の将軍派遣等の『記紀』の記事より追加考察する。

これらの記事は『記』と『紀』で、若干違っている。その違いと記事内容、及び史跡等を比較して東征と派遣の時期を考察し、神武天皇と崇神天皇が同一であることを検証する。

参考資料は、角川文庫『新訂古事記』（角川書店、1977年）、新編日本古典文学全集『日本書紀』①（小学館、1994年）を用いた。

Ⅱ．神武天皇の東征記事

１．古事記の東征記事

『記』より東征記事を抜粋し比定地を加筆する。

① 同母兄五瀬命（いろせ）と二柱、高千穂宮にて議（はか）り、日向（**宮崎県**）より発（た）たし筑紫（**福岡県**）に幸（い）行でましき。

② 豊国の宇沙（**宇佐市**）に到りましし時に、

③ 竺紫（つくし）の岡田宮（**遠賀川河口**）に一年ましましき。

④ 阿岐国（あき）の多祁理宮（たけり）（**広島県安芸郡府中町**）に七年、

⑤ 吉備の高島宮（**岡山市南区宮浦**）に八年ます。

⑥ 亀の甲（せ）に乗りて釣しつつ打ち羽挙（はぶ）き来る人と速吸（はやすひ）の門（と）（**明石海峡**）に遇ひき。

⑦ 浪速（なみはや）の渡（わたり）（**上町台地北端**）を経て、青雲の白肩津（**東大阪市日下町**）に泊（は）てたまひき。この時、登美の毗古（ながすねびこ）、軍を興して、待ち向へて戦ふ。・・・、五瀬命、御手に登美毗古が病矢串（いたやぐし）を負はしき。

⑧ 南の方より廻り幸でます時に、血沼（ちぬ）の海（**大阪府泉南郡**）に到りて、その御手の血を洗ひたまひき。

⑨ 紀の国の男の水門（みなと）（**和歌山市紀ノ川河口**）に到

り、崩る。陵は紀の国の竈山(**和歌山市和田**)にあり。

⑩ 熊野の村(**和歌山県かつらぎ町の天野盆地**)に到りし時に、大きなる熊、髪より出で入りて失せぬ。ここに神倭伊波礼毗古命熊忽にをえまし、また御軍も皆をえて伏しき。

⑪ この時に熊野の高倉下、一横刀を賫ちて、天つ神の御子の伏せる地(**同上**)に到りて献る。

⑫ 天つ神の御子、これより奥つ方(**紀ノ川上流**)に入りたまひそ。かれその八咫烏導きなむ。その立たむ後より幸行でまさね。

⑬ 吉野河の河尻(**五條市阿田町付近**)に到りましき。時に筌をうちて魚取る人あり。「僕は国つ神名は贄持の子」とまをしき。こは阿陀の鵜養の祖なり。

⑭ 尾ある人井より出で来(**吉野郡吉野町丹治付近**)。「僕は国つ神名は井氷鹿」こは吉野の首等が祖なり。

⑮ その山に入り、また尾ある人に遇へり(**吉野郡吉野町国栖付近**))。「僕は国つ神名は石押分の子、こは吉野の国巣が祖なり。

⑯ 其地より蹈み穿ち越えて(**佐倉峠越え**)、宇陀(**宇陀市宇太水分神社付近**)に幸でましき。宇陀に、兄宇迦斯弟宇迦斯と二人あり。かれその弟宇迦斯、こは宇陀の水取等が祖なり。

⑰ 忍坂(**桜井市忍坂付近**)の大室に到りたまふ時に、尾ある土雲八十建その室にありて待ちいなる。

⑱ 然ありて後に、登美毗古を撃ちたまはむとする時、また兄師木弟師木を撃ちたまふ時に、御軍暫疲れたり。かれここに邇芸速日命まゐ赴きて、天つ瑞を献りて仕へまつりき。

⑲ かれかくのごと、荒ぶる神どもを言向け和し、伏はぬ人どもを退け撥ひて、畝火の白檮原宮(**橿原市畝傍山山麓**)にまして、天の下治らしめしき。

2．日本書紀の東征記事

『紀』より東征記事を抜粋し比定地を加筆する。

① 年四十五歳に及りて、諸兄と子等とに謂りて曰はく。遂に邑に君有り、村に長有り、各自彊を分ち、用ちて相凌ぎ躒はしむ。太歳甲寅にあり。其の年10月5日、天皇、親ら諸皇子・舟師を帥ゐ東を征ちたまふ。

② 速吸之門(**豊後水道**)に至ります。時に、一の漁人有り、艇に乗りて至る。

③ 行きて筑紫国の菟狭(**宇佐市**)に至りたまふ。

④ 11月9日、天皇、筑紫国の岡水門(**遠賀川河口**)に至ります。

⑤ 12月27日、安芸国に至り埃宮(**安芸郡府中町**)に居します。

⑥ 乙卯年3月6日、徙りて吉備国に入り、行館を起てて居します。是を高島宮(**岡山市南区宮浦**)と曰ふ。三年を積る間に、檝を脩へ兵食を蓄へむ。

⑦ 戊午年2月11日、皇師、遂に東し舳艫相接げり。方に難波の碕(**上町台地北端**)に到るに、3月10日、遡流而上り、径に河内国の草香邑(**東大阪市日下町**)の青雲の白肩津に至ります。
4月9日、乃ち還りて更に東胆駒山(**善根寺越え**)を踰えて、中洲(**奈良県**)に入らむと欲す。長髄彦、孔舎衛坂(**善根寺坂**)に徼りて与に会戦ふ。流矢有りて、五瀬命の肱脛に中る。

⑧ 5月8日、軍茅渟の山城水門(**大阪府岬町**)に至る。

⑨ 時に五瀬命、矢瘡痛みますこと甚し、雄誥す。号けて雄水門(**紀ノ川河口**)と曰ふ。進みて紀国の竈山(**和歌山市和田**)に到りて、五瀬命軍に薨りましぬ。

⑩ 6月23日、軍名草邑(**和歌山市紀三井寺**)に至り、則ち名草戸畔といふ者を誅つ。遂に狭野(**新宮市佐野**)を越え、熊野の神邑(**新宮市三輪崎**)に到り、且天磐盾(**新宮市神倉山**)に登り、仍りて軍を引き漸に進む。海中にして卒に暴風に遇ひ、皇舟漂蕩ふ。熊野の荒坂津(**熊野市二木島町**)に至ります。因りて丹敷戸畔(**三重県度会郡大紀町錦**)といふ者を誅つ。時に神、毒気を吐き、人物咸に瘁えぬ。

⑪ 時に彼処に人有り、号けて熊野の高倉下と曰ふ。、庫開きて視るに、果して落ちたる剣有り。即ち取りて進る。時に天皇、適く寐ねませり。

⑫ 既にして皇師中洲に趣かむとす。而るに山中嶮絶しく、復行くべき路無し。果して頭八咫烏有り、空より翔び降る。山を蹈み行を啓き、乃ち烏の向へるを尋め、仰ぎ視て追ふ。

⑬ 遂に菟田の下県に達る。菟田の穿邑(**宇陀市菟田野町宇賀志**)と曰ふ。8月2日、天皇、兄猾と弟猾といふ者を徴さしめたまふ。是の両人は菟田県の魁帥なり。

⑭ 是の後に、天皇吉野の地を省むと欲し、乃ち菟田の穿邑より、吉野に至りましし時に、人有りて井中より出でたり。光りて尾有り「臣は是国神なり。名けて井光と為ふ」。吉野の首部が始祖なり。(**吉野郡東吉野村丹生川上神社付近**)

⑮ 更少しく進みたまふに、亦尾有りて磐石を披けて出づる者あり。「臣は是磐排別の子なり」。吉野の国樔部が始祖なり。(**吉野郡吉野町国栖付近**)

⑯ 水に縁り西に行きたまふに及りて、亦梁作ち取魚する者有り。「臣は是苞苴担が子なり」。阿太の鸕養部が始祖なり。(**五條市阿田町付近**)

⑰ 9月5日、天皇、彼の菟田の高倉山(**宇陀市大宇陀守道**)の巓に陟り、域中を瞻望みたまふ。時に国見丘(**宇陀市の経ヶ塚山**)の上に八十梟帥有り。復兄磯城が軍有り、磐余邑(**桜井市**)に布き満めり。倭国の磯城邑(**桜井市**)に磯城八十梟帥有り。又高尾張邑(**御所市**)に赤銅八十梟帥有り。丹生の川上に陟り、用ちて天神地祇を祭りたまふ。(**宇太水分神社**)
10月1日、先ず八十梟帥を国見丘に撃ちて、破り斬る。大来目部を帥ゐて大室を忍坂邑(**桜井市忍坂**)に作り、虜を誘りて取れ」、頭椎剣を抜き、一時に虜を殺す。

⑱ 11月7日、兄磯城を徴さしむ。兄磯城命を承けず。其の梟帥兄磯城等を斬りたまふ。
12月4日、皇師遂に長髄彦を撃つ。金色の霊しき鵄有りて、飛来り皇弓の弭に止れり。饒速日命、長髄彦を殺して其の衆を帥ゐて帰順ひぬ。

⑲ 己未年2月20日、層富県の哆の丘岬(**大和郡山市新木町**)に新城戸畔といふ者有り。又和珥の坂下(**天理市和珥**)に居勢祝といふ者有り。臍見の長柄の丘岬(天理市長柄町)に猪祝といふ者有り。又高尾張邑(**御所市西南部**)に土蜘蛛有り。
辛酉年正月1日、天皇、橿原宮に即帝位す。

3. 記紀の東征記事の比較

『記』は天武天皇が自分の出自を隠し、皇位継承の正当性を示すために、「帝紀と上古の諸事」を基にして編纂させた国史書である。

しかし、天武は完成を見ることなく崩御した。

その後を受けた藤原不比等が『紀』の「水先人」として、『記』を作った。従って、その記述は簡素である。これに対して、『紀』は加筆、潤色が行われ、記事内容が複雑で、矛盾に満ちている。この『記』・『紀』の記事内容の違いを、現在の比定地と合わせて検証する。

(1)速吸の門・速吸之門

速吸の門・速吸之門とは海峡のことで、そこの潮流の速さに戸惑っている記事である。

『記』では、吉備の高島宮から浪速の渡りへの航路の間にあるので、明石海峡を指している。

『紀』では、東征に出発し、筑紫国の菟狭に至る間である。出発地は明記されていないが、曽祖父の瓊瓊杵尊が〔**日向の襲の高千穂峰に天降ります**〕とあるので、出発地はこの日向で宮崎県とされる。従って、速吸之門は宇佐市への途中の豊後水道となる。しかし、本拠地の直近であるので、その潮流等の情報は既に持っており、戸惑う事はなかった。

つまり、速吸の門は明石海峡である。

(2)熊野の村・熊野の神邑

この「熊野」の記事が一番大きな違いである。『記』では、熊野の村の後、紀ノ川沿いに上流へ向かい、五條市阿田町付近に至っている。紀ノ川は五條市に入ると吉野川となる。つまり、吉野河の河尻に至るのである。その後も、吉野町丹治付近→国栖付近→宇陀市→桜井市忍坂へと矛盾なく、順当に進んでいる。

『紀』では、五瀬命を和歌山市和田の竈山に葬り、隣接する紀三井寺で名草戸畔を討った後、行き成り新宮市の山寄りの佐野から海寄りの三輪崎に至るとある。つまり、和歌山市から険しい山越をして新宮市に至った事になり不自然である。更に、海辺から返して天磐盾(新宮市神倉山)に登り、進んで海中に入り暴風に遭遇し漂流したとある。不可解な行進である。

舟は丹敷浦(三重県大紀町錦)に着き、丹敷戸畔を討った後、神の毒気に遭い気絶した。原因不明である。しかし、高倉下の献上した剣で目覚めた。目覚めた後、大和に向かうに、また険しい山越えを行っている。因って、着いた先は吉野川上流の宇陀市菟田野町宇賀志である。ここから直接桜井市忍坂へ入ることが出来るのに吉野川を下り五條市阿田町付近まで行き、引き返している。

以上のように、『紀』の「熊野」の記述は不可解な所が多い。これは、簡素な『記』の記述に対し、重厚な記述にする為に矛盾に満ちているのが分かりながら、意図的に加筆された為である。

つまり、熊野村への入村経路、及びそれ以後の大和への経路は『記』の記述に従うべきである。

4．神武の東征時期にはいつか？

神武の東征時期が推考出来る記述は２箇所ある。それは、『記』の文10の熊野の村と『紀』の文⑰の高尾張邑の赤銅八十梟帥の箇所である。

(1)熊野の村の出来事

「熊野」の地名は地名譚とは明記していないが、次の文によると考える。

大きな熊、髪(野原)より出で入りて、すなはち失せぬ。

「是によりて熊野の村」とされたと思う。

『記』では、神武一行は五瀬命を和歌山市和田の竈山に葬った後、紀ノ川沿いに東行し、俄に気を失っている。この場所と原因を考えてみる。

「熊野ク.マ.ノ」の語源を古代日本語で解析する。〔クッ；川岸の高い断崖。マ/モイ；山間で平地が湾状の所。ノ/ヌツ；草地。〕である。

即ち、紀ノ川沿いの盆地であり、それはかつらぎ町天野盆地である。この盆地には丹生都比売神社がある。「丹」とは硫化水素からなる鉱物の辰砂のことであり、辰砂を空気中で400－600℃に加熱すると水銀蒸気と亜硫酸ガスが発生する。この「熊野の村」では紀ノ川/吉野川上流で産出される丹を移送して来て精製しており、神武一行はこの精製で発生した亜硫酸ガスにより気を失った。

(2)高尾張邑の赤銅八十梟帥

高尾張邑は奈良盆地南西部の葛城地域にあった邑であり、そこに赤銅八十梟帥と呼ばれた一族と土蜘蛛と呼ばれた土着の小人一族がいた。

赤銅は青銅の一種で、銅に混ぜる錫の量が少なく赤銅色を呈したものである。青銅器とはこの赤銅器が錆びて緑色になったものを言う。

赤銅八十梟帥とは製銅技術を持った集団、即ち、青銅器を作る集団である。

(3)東征時期の推考

ⅰ.「丹(に)」の生産からの推考

丹は中国において古くから知られ、『史記』巻128貨殖列伝に丹の発掘地を見つけた者が巨利を得た記述があり、日本でも弥生時代から生産されており、『魏志』倭人伝では邪馬壹国の「山に丹あり」と記述されている。この邪馬壹国に伝わった技術が吉野川上流に伝えられた。では、神武の東征はいつかであるが、東海の古代第170号(H26.10)にて行った神武及び八代の天皇の活動時期の考察より推考すると、神武は弥生後期、綏靖も弥生後期、安寧が古墳前期であるので、神武の東征は弥生後期前半頃（100～180年）と考えられる。

ⅱ．青銅器生産からの推考

近畿での青銅器は銅鐸である。銅鐸は１世紀末頃に急に大型化され、２世紀末まで続くが、３世紀になると突然作られなくなった。

この理由は、神武紀二年二月二日の論功行賞の条に「**剣根といふ者を以ちて葛城国造としたまふ**」とあるように、同じ青銅器である銅剣によって、銅鐸が滅ぼされた事にある。つまり、銅剣圏の九州勢力が銅鐸圏の近畿勢力を制した事を示している。

この事から、神武の東征は２世紀末頃と考える。

ⅲ．東征時期の絞り込み

ⅰ及びⅱの考察より、神武の東征は弥生後期中葉と考える。即ち、150～200年の間と考える。

『記』にはないが、『紀』には神武即位前紀より太歳干支が記されるようになった。そして、東征談議を行った年を「太歳甲寅」とし、辛酉の年に即位し、神武七十六年127歳で崩御したと記されている。これらの年のうち、即位の年を辛酉としたのは、讖緯説の辛酉革命の思想(新編『書紀』①、232頁頭注参照)によるものであり、推古九年辛酉を起点とすると紀元前660年となる。

しかし、東征は２世紀後半であるので、辛酉年をこの間に求めると181年となる。即ち、174年甲寅に出発し、吉野川流域の土蜘蛛等と大和、葛城の八十梟帥等を討伐し、181年辛酉に即位し「始馭天下之天皇」と称されたのである。

Ⅲ．崇神天皇の将軍派遣の記事

１．古事記の将軍派遣の記事

『記』より将軍派遣の時期が推考出来る記事を抜粋する。

① 僕(あ)は大物主の大神、陶津耳(すゑつみみ)命が女、活玉依毗売に娶ひて生む子、名は櫛御方命の子、飯肩巣見(いひがたすみ)命の子、建甕槌命の子、僕(やつこ)意富多多泥古とまをしき。

② 大毗古命は高志の道に遣し、

③ その子建沼河別(たけぬなかはわけ)命は、東の方十二道に遣して、その服(まつろ)はぬ人どもを和(ことむけやは)平さしめ

④ 日子坐王は旦波(たには)国に遣して、玖賀耳の御笠を殺(と)らしめしき。

⑤ その父大毗古と共に、相津(あひづ)に往き遇ひき。

⑥ ここに初めて男の弓端(ゆはず)の調(みつき)、女の手末(たなすゑ)の調を貢(たてまつ)らしめたまひき。

⑦ その御世を称へて、初国知らしし御真木天皇。

⑧ この御世に、依網(よさみ)の池を作り、また軽に酒折の池を作りき。

⑨ 豊木入日子命は上つ毛野、下つ毛野の君等が祖

２．日本書紀の将軍派遣の記事

『紀』より将軍派遣の時期が推考出来る記事を抜粋する。

① (崇神７年8月大田田根子対(こた)へて曰(もう)さく)父を大物主大神と曰し、母を活玉依媛と曰す。陶津耳が女なりともをす。亦云はく、奇日方天日方武茅渟祇(たけちぬつみ)が女なりといふ。

② (同10年)9月9日大彦命を以ちて北陸に遣し、

③ 武渟川別を東海に遣し、

④ 吉備津彦を西道に遣し、

⑤ 丹波道主命を丹波に遣したまふ。

⑥ (同11年)4月28日四道将軍、戎夷(ひな)を平(ことむ)けたる状(さま)を以ちて奏(まを)す。

⑦ (同12年)9月16日、始めて人民を校(かむが)へて、更調役を科す。此を男の弭(ゆはず)調(みつき)、女の手末(たなすゑ)調と謂ふ。

⑧ 天下大きに平なり。故称へて御肇国天皇と謂ふ。

⑨ (同17年7月1日)舟は天下の要用(むねつもの)なり。其れ諸国に令して船舶を造らしめよ。

⑩ (同48年4月19日)豊城命を以ちて東を治めしめたまふ。是上毛野君・下毛野君が始祖なり。

３．将軍派遣時期の絞り込み

(１)意富多多泥古・大田田根子

意富多多泥古は大物主大神の玄孫(4代目)となっているが、大田田根子は大物主大神の子となっている。しかし『記紀』共に母親は活玉依毗売・媛であるが、『紀』では「亦云はく、奇日方天日方武茅渟祇」とあり、『記』が伝える大物主大神の子、孫、曽孫の三命の名と比べると良く似ている。

『記』櫛御方(くしみかた)飯肩巣見(いひがたすみ)建甕槌(たけみかづち)

『紀』奇日方天日方武茅渟祇(くしひかたあまつひかたたけちぬつみ)

即ち、『記』の三命は一人で、活玉依毗売の別命か、その子と考えられ、意富多多泥古は大物主大神の子か孫となり、大田田根子と同時代となる。また、神武天皇は『記紀』共に三島溝橛の女と大物主との間の娘と結婚している。つまり、神武も大田田根子も同時代の人となり、大田田根子を祭主に任命した崇神も同時代となる。

(２)将軍の派遣

『記』では三将軍で、『紀』では四将軍であるが、注目すべきは大毗古命・大彦命とその子建沼河別・武渟川別の二将軍の派遣である。大彦命は北陸道、武渟川別は東海道へ派遣された。この時期を検証する。

ⅰ．消えた銅鐸

神武が大和を平定した2世紀末に近畿では銅鐸が消えた。神武は大和を平定したが、東国への働きかけはしなかった。その東国の銅鐸は濃尾平野で作られた三遠式銅鐸と称されるものであった。この三遠式銅鐸も近畿と同じ2世紀末に消えている。これは、大和から派遣された二将軍による東国の平定によるものである。因って、二将軍の派遣は2世紀末であり、派遣した崇神も2世紀後半の人となり、神武と同時代の人となる。

ⅱ．東海土器の普及

古墳時代前期の標識土器である元屋敷式土器が

北陸・新潟や関東・群馬で多く出土している。この元屋敷式土器は一宮市の元屋敷遺跡で作られた土器である。元屋敷集落は弥生前期から栄えており、弥生後期でも活動が続いていた。この集落で作られた土器が二将軍の派遣に従軍した東海の兵士によって北陸、関東の各地に齎され、その後も交流、流通し古墳時代前期の古墳、集落遺跡より出土している。つまり、二将軍の派遣は２世紀末である。また、この二将軍の派遣は九州勢力が大和を平定した事を各地へ知らせる行為であり、近畿政治的同盟評議会への参加を促した行為である。因って、崇神を初国知らしし天皇と称された。

iii. 上毛野・下毛野君の祖

『記』『紀』共に豊木入日子命・豊城入彦命を上・下毛野君の始祖としている。この命は紀伊国の荒河戸畔の女の子であり、『記』では崇神の子の系譜で最初に記述されている。これは、豊城命が崇神の第一子であることを示しており、活目命よりかなりの年上と考える。つまり、『紀』の歴史経緯からすれば、大彦命の娘の御間城姫を娶る数年前に、紀伊国の荒河戸畔の娘を娶る事はあり得ない。そこで考えられるのは、豊城命は神武が紀ノ川沿いに大和に入国した時、最初に荒河戸畔を平定し、その娘を娶り生まれた子であるという事である。ここでも神武と崇神の同一が見られる。そして、豊城命は長じて、弥生末の3世紀初めに纒向で行われた同盟評議会で、上・下毛野を治める任を受け赴任した。群馬県の大型前方後円墳はこれに因るのである。

Ⅳ. まとめ

神武天皇の東征と崇神天皇の将軍派遣を検証した結果、これ等は同時代の出来事であり、一連の出来事であった。つまり、神武の東征は九州勢力の大和入場であり、崇神の将軍派遣は大和へ入場した九州勢力が土着の近畿勢力を統合し、近畿政治的同盟評議会を設立した事を東海、北陸、関東、丹波等の各地へ知らせ、同盟評議会への参加を促した行為でありあった。また、神武、崇神の称号を見ると、その漢字が表す意味より、始馭天下→所知初国→御肇国と大和統治から東国統治により建国に至る経緯を表している。これらからして神武と崇神は同一人物であると考える。

九州古代史探訪旅行 その４

安城市　山田　裕

３．「磐井の墓」の疑問

磐井の墓の定説は、「筑後國風土記日。上妻縣。々南二里有_筑紫君磐井之墓墳_。高七丈。周六（十）丈。周六墓田南北各六十丈。東西各四十丈。石人石盾各六十枚。（中略）古老傳云。當雄大迹天皇之世_。筑紫君磐井豪強暴虐（後略）」（『釈日本紀巻十三』）より、福岡県八女市にある「岩戸山古墳」とされている。久留米市中心部や高良大社との距離は10kmほどの距離にある。同古墳を含む八女丘陵には５世紀から６世紀にかけての古墳が数多く築かれており、前方後円墳墳12基、装飾古墳3基を含め約300基に及んでいる。

岩戸山古墳からの眺望は開けていて、古代の筑後平野を偲ぶことが出来る。八女丘陵を散策すると、坂を登ったり下りたりの連続である。古墳の築造はこの小高い丘に相当する部分を削平し、版築工法で固めて方墳部分を造成し、削平した残土で円墳部分を造成したと推測される。技術的には石室の造成が最も難工事であったと考えられる。

『紀』によれば、男大迹天皇の御代、大将軍物部大連麁鹿火と筑紫国造磐井が筑紫の御井郡で交戦し、遂に磐井を斬殺した。戦後交渉は、磐井の子筑紫君葛子が「粕屋の屯倉」を献上し、葛子は死を免れたという。

『筑後風土記』逸文と『紀』の記述は微妙に違う。

『筑後風土記』逸文	『日本書紀』
雄大迹天皇	男大迹天皇
筑紫君磐井	筑紫国造磐井
筑紫君葛子	

「東海の古代」会員石田敬一氏は、勝利者を男大迹天皇ではなく雄大迹天皇と指摘し、磐井を筑紫国造ではなく筑紫君と指摘してい

る。

磐井の墓を巡って、私の最大の疑問は「勝利者である雄大迹天皇が、何故筑紫平野の「粕屋の屯倉」を得たのであろうか。常識的に考えれば敗者の支配地域である豊かな筑後平野の一角を得ると思われるのに、『紀』の記述は真逆である。

また何故、戦場が御井郡なのであろうか。**『和名類聚抄』によれば、御井郡は現在の久留米市・小郡市の一部・三井郡大刀洗町の区域とされている。この三区域に共通するのが、九州最大の河川、筑後川である。物部大連麁鹿火軍と筑紫君磐井軍は筑後川の両側を挟んで交戦したと推測できる。**

以上の推論が正しければ、磐井の墓は筑後川右岸に存在するのではあるまいか。

福津市宮司元町の宮地嶽神社宮司の浄見(きよみ)氏は、神社内の宮地嶽古墳の被葬者を「筑紫君磐井」と主張されている。同社は「筑紫舞」の伝統を継承している神社でもある。通説は、宗像氏一族の首長の墓としているが、地元学会からは否定する見解が陸続と発信されている。例えば九州大学名誉教授の西谷氏は最近「安曇氏の首長」とされているが、同古墳の規模は石舞台古墳を凌駕する規模で、副葬品も豪華でとりわけ海外交易品と目される長方形緑瑠璃板があり、「宗像氏や安曇氏」のような一地方の豪族の墓とは想像ができないのである。

同社の前の道路502号線をから北に向かい、宮ノ元交差点を右折すると495号線に入る。さらに北上すると、道路は緩やかな登り道で、両側には前方後円墳を含む円墳が随所にみられる。ここが「津屋崎古墳群」で、津屋崎町教育委員会発行の“『国指定史跡 津屋崎古墳群整備計画』に関する再検討―新原・奴山古墳群の整備計画―2016年3月”によれば、「津屋崎古墳群は、福津市北部の丘陵および台地上南北８km、東西２kmに分布する。北から勝浦井ノ浦古墳、勝浦峯ノ畑古墳、新原・奴山古墳群、生家大塚古墳、大石岡ノ谷古墳群、須多田古墳群、在自(あらじ)剣塚(つるぎづか)古墳(前方後円墳,墳長101.7m)、宮地嶽古墳などから成る。現存する古墳の総数は60基（前方後円墳16基、円墳43基、方墳1基）で、規模と集中度は九州北部における代表的な古墳群と言える。築造年代は5世紀から7世紀にわたり、大型墳に注目すると北から南への変遷を窺える。」との報告である。

地元の郷土史家に尋ねると約300基の古墳群を数えるとのこと。津屋崎古墳群は、いずれも台地を削平して築かれたことが一目でわかる。同古墳群の天降天神社古墳の周囲には「天降神社」があり、大己貴命・少彦名命・素戔嗚命の三神が祀られている。**同古墳群の圧倒的な威容をみると思わず「倭の五王」の墓域群と錯覚するほどである。**

『太宰府・宝満・沖ノ島－古代祭祀線と式内社配置の謎』（伊藤まさこ、不知火書房）で、**「沖ノ島の岩上祭祀は終了し岩陰祭祀に移るのだがあいだに百年ほどの空白時期がある。つまり、岩陰祭祀が始まるのは六世紀半ばまたは後半なのである。二つの祭祀には、祭祀場所や奉献品の変化だけではなく、政治状況の変化も反映していると聞く。六世紀前半の「磐井の乱」が大きく影響していると囁かれているのである。203p～204p」と記している。**

著者の伊藤まさこさんに、該当部分の記述を尋ねると、**沖ノ島祭祀の空白期間は「磐井の乱」と関係し、磐井の敗死によって、空白期間が生じたのではないか。」という推論を立てておられる。この推論から得られる仮説は、津屋崎古墳群のいずれかの古墳が「“磐井の墓”に相当する可能性を秘めている。**

久留米大学の大矢野栄治教授に「磐井の墓」についてお尋ねしたところ、「筑後川右岸と考えるが、特定までには至らない。」との回答であった。

これ以上、私の推論は発展しないが、『神功皇后の伝承を歩く上下巻』（不知火書房）の著者綾杉るなさんは、現在磐井の子葛子(かつし)のその後の研究・調査が進んでおり、「仮題 宮地嶽神社と筑紫磐井の末裔」として、近いうちに発刊されるとの由、今から楽しみにしている。

（つづく）

常世国と高天原と天国

名古屋市　　佐藤章司

はじめに

『古事記』『日本書紀』で語られる常世の国とは、南方系海洋民である倭人（『魏志』倭人伝に記す「大人と下戸」のうち大人層）のルーツであって、禊祓・二倍年暦・鯨面文身等の習慣の元となった国ではないかと思われる。

以下に、それはいかなる国で、どこに実在した国かを考察した。合わせて天国・高天原についても考察したので報告する。

なお、参考資料として『古事記全訳注』（次田真幸編、講談社学術文庫、1984年）、『日本書紀全現代語訳』（宇治谷孟編、講談社学術文庫、1988年）を用い、それぞれ『記』、『紀』として記す。ルビは佐藤が加筆した。

Ⅰ　常世国

1　常世の長鳴鳥と天の石屋戸神話

「天の石屋戸」神話では、天照大御神がスサノヲ命による神田の破壊・祭殿を穢すなどの暴力・狼藉の為、天の石屋に閉じ籠ってしまうのだが、この為に暗く闇となった高天原や葦原中国を再び元のように明るさを取り戻そうと、常世の長鳴鳥を集め長く鳴かせる様子が語られる。『紀』も『記』と同様に、常世の長鳴鳥を集めて互いに長鳴きをさせたと記している。

『記』・・・常世国から⇒高天原へ

『紀』・・・常世国から⇒高天原へ

長鳴鶏は常世国から「人」と共に連れてこられて高天原に来た。この「人」とは誰かと問えば、高天原の住人である「海人＝天（敬称）」の祖先ではなかろうか。又、この常世の長鳴鳥は、この説話の語られる時間帯の古さからも、未だに品質改良されていない鶏の原種とされる「赤色野鶏*1」と思われる。

2　常世国と少名毘古那

『記』の出雲神話における少名毘古那神の説話について、次に概要を記す。

(1) 大国主神（大穴牟遅神）と少名毘古那神が共同して出雲国を作りかためた。

(2) 後に少名毘古那神が常世国に渡って、行ってしまう。

(3) 大国主神が「どの神と共に国をつくり、国を治めたら良いのだろうか」と愁いて云う。

(4) この時、海を照らして依りくる神があって、その神が云うには「私の御魂を奉りなさい。・・・（略）・・・私を倭の青垣の東の山上に斎き奉れ」と。原文は「奉于倭之青垣東山上」とある。

さて、この大国主神の問い尋ねたことに対する「倭の青垣の東の山上」は御諸山上に坐す神とされるが、この倭とはどこにあるのか検証する。

『記』では、神武天皇東征以前の説話場所は出雲であり筑紫であって、神武東征があって初めて大和へと説話内容が展開するわけで、少名毘古那神の説話の「倭」は『魏志』倭人伝等の示す倭であって、未だ大和以前の神話である。倭の青垣とは、説話内容から見て海から来た神の目線からの風景なのであって、大和ではないし、大和には海がない。大半の解説書、例えば『古事記』（次田真幸著、講談社学術文庫、p 141 注書き）では、この倭を“やまと”とし、御諸山を三輪山としているが、その根拠が示されているわけではない。これは出雲と筑紫を舞台にした時代の説話であって、この「倭」は『魏志』倭人伝の示す倭であり“わ”である。『記』編纂者は、この『魏志』倭人伝をさり気なく、この『記』の中に刷り込んでいる。「倭とあれば何でも“やまと”と読む。」ことには大いに問題があると指摘しておきたい。又、倭に「やまと」の読みはない。この説話の後、天孫降臨説話に続くのであるから、この倭は本来、筑紫を示すものである。

『紀』では、少彦名命が出雲の熊野の岬に行き、ついに常世に去られたと簡単に記述されている。『紀』の少彦名命は、『記』では「少名毘古那神」

*1赤色野鶏　：　原産国はインド、東南アジア。鶏の原種（祖先）で現在も野生で生息している。体が小さく、かなり飛ぶことができる。産卵数は年３０～６０個。（名古屋農業センター説明版より）

と記されているが同一人物であろう。

『記』・・・出雲の海から⇒常世国へ

『紀』・・・出雲の熊野の岬から⇒常世へ

3　神武兄弟と常世国

神武と兄の五瀬命が相談して東征し、大和に行くが、神武には兄弟が４人いる。五瀬命・稲氷命・御毛沼命・豊御毛沼命である。末弟の豊御毛沼命が神武であり、後の名が神倭伊波礼毘古命である。『記』には「御毛沼命は、波の穂を踏みて常世国に渡りまし、稲氷命は妣(はは)の国として、海原に入りましき」と記述され、東征前に彼らの故郷の海で、暴風にあったのだろうか稲氷命と御毛沼命を失っている。

他方、『紀』には４人の兄弟が共に東征に出発するが、河内湖の日下での戦いで負った傷が元で雄水門の海で五瀬命が亡くなり、紀の国の竈山に葬った後、東へと向かう途中の熊野の海で、暴風に合い稲飯命は海に入り鋤持神になり、三毛入野命は波頭を踏んで常世国においでになったと記している。

『記』・・・彼らの故郷である筑紫の日向（糸島半島）の海から⇒常世国へ

『紀』・・・熊野灘から⇒常世国へ

常世国は『記』『紀』ともに「波の穂」「波頭」を踏んで行く先にあると記述されている。

4　時じくの木の実と常世の国

『記』では、垂仁天皇の治世に多遅摩毛理(たじまもり)が、ついに「常世国」に行き着き「時を定めずに実っている香り高い木の実」を求め得た。その木の実は「縵(かげ)八縵・矛八矛」の形をして、「これ今の橘なり」と語られる。

他方、『紀』には次のとおりある。

① 垂仁九十年（61）、田道間守を常世国に遣わして「非時の香果」を求めた。今の橘である。

② 同上九十九年（70）、天皇巻向宮で年百四十歳で崩御した。

③ 翌年(71)、春三月十二日、田道間守が常世国から非時の香果を持って帰国した。これは八竿八縵である。

④ 常世国は神仙の国で俗人の行ける所ではないため、帰るまでに十年を経た。

さて、垂仁天皇時代は「二倍年暦」の時代であり、これを一倍年暦で表すと天皇の年齢は70歳であり、行き還りの所要期間は５年間である。

上のように『紀』では垂仁天皇は一世紀の人物として描かれているが、実年代は４世紀に活躍した人物と思われ、多遅摩毛理(たじまもり)が常世国で「非時の香果」を求めたのも４世紀であろう。『魏志』倭人伝によると３世紀の倭人の世界には「橘あり、以て滋味となすを知らず」とあり、垂仁の時に10年の時間をかけてまで求めなくても既に倭国にあったのである。「非時の香果」は「今の橘である」の記述は、『記』編纂者の挿入である。

『記』・・出発地は住吉（筑紫か河内か？）⇔常世国

『紀』・・巻向か？（筑紫か河内か）⇔常世国

『記』『紀』の常世国は、同一国、同一場所にあると思われ、この常世国の「非時の香果」も長鳴鳥の「赤色野鶏」と同じようにインド、東南アジアのエリア内に実在した国であろう。

そもそも、「禊」や海難を避けるための「鯨面文身」は黒潮文化圏にあると思われ、また「二倍年暦」の常世国は、「赤色野鶏」のルーツと同じように、東南アジアから黒潮の流れ来る沖縄（琉球）→フィリッピン→ミクロネシヤのスッタランド・黒潮文化圏に辿り着く。(『東海の古代』197号（2017年1月）掲載の「倭人の二倍年暦と暦」)

ここには小さな巻貝の宝貝や海ガメを産出し、宝貝は中国において世界最古の貨幣となり、海カメの甲羅は中国（殷）に渡り、「令亀の法」の吉凶の占いや、甲骨文字の発明を生み、新たな文明の基となった。他方、スッタランド・黒潮文化圏には数多くあるラグーンの場で海洋を渡る航海法や優れた漁法が生まれた。現在、太平洋の真ん中にあるハワイ諸島には２千年ほど前に人間が住むようになった痕跡があり、太平洋を渡りきる航海術があればこそ可能であると思う。

『記』に記す「神生み神話」や「国生み神話」は、矛先（注：古田説では真福寺本『古事記』を尊重し矛ではなく弟とする）から海水の滴れ落ちる塩が重なり積もってオノゴロ島が誕生する神話

であって、玉璧文明圏の大陸型の人間では、この国生み神話が語られることは出来ないだろう。

イザナギ命、イザナミ命は、イザナ・ギ（男神）、イザナ・ミ（女神）であり、共通する「イサナ」は鯨の古名であり、神に見立てている。これは『魏志』倭人伝に、倭人は「男子は大小となく皆、鯨面文身す」と記すとおりであろう。鯨面模様は国土を生み、神々を化生させたイナザギ命をシンボル化している。鯨面は東アジアのなかの「イレズミ」でも倭人特有のものだった。

さらにこの説話の後、イザナギ神の禊祓に続き、左の目を洗って天照大神を、右の目を洗って月読命を、鼻を洗ってスサノオ命が化生し、天照大神には高天原を統治させ天照大神だけには頸珠を賜っている。この頸珠も貝製の頸珠ではなかろうか。月読命には夜の食国を統治させ、スサノオ命には海原を統治させる。例えば砂漠を統治させるのは砂漠の民であり、草原を支配する民は草原に生きる民の神話となり、海原を統治させるのは海洋民の神話となる。月読命の統治する夜は月や星（星座）が輝き、月日や方向（定位置の北極星）や星座及び満潮・干潮等も読取る能力が必要とされたのであろう。記紀説話（神話）は古代海洋民の神話となっている。

５　『魏志』倭人伝と『日本書紀』

『記紀』編纂者は『魏志』倭人伝を手元において、倭人伝の記述に合うように編纂しているが、倭人伝に記されている有無を整理すると、倭国の産物で「有」とするものに橘がある。多遅摩毛理（たじまもり）が持ち還った垂仁九十九年の翌年（71年）は、魏使の梯儁が来倭した正始元年（240）から169年前のことになるので「有」である。ちなみに『魏志』倭人伝には「牛・馬・豹・羊・鵲（かささぎ）なし」と記され、これらは「無」である。

次に、これらの「無」とするものについて『紀』の記事と比較検討する。

(1) 牛

・安閑二年（535）九月十三日条

別に大連に詔して「牛を難波の大隅島と姫島の松原とに放って、名を後の世に残そう」と仰せられた。

『記』には同記事は見当たらなく、難波の大隅島と姫島の松原はどこにあったのか詳しく知ることが出来ないが、安閑紀や宣化紀は任那割譲を主導した大伴金村や物部麁鹿火が多出するので、九州王朝の史書から転用されているのではなかろうか。

(2) 馬

・応神十五年（284）秋八月六日条

百済王は阿直岐（あちき）を遣わして良馬２匹を奉った。･･･（略）･･･阿直岐に掌（つかどら）せて養わされた。

『魏志』倭人伝に記す、壱与、倭の大夫率善中郎将･･･（略）･･･政等の還るを送らしむ。の記事は西暦266年のことであり、百済から馬が来た284年は張政帰国後18年後で、倭国には「その地には牛・馬・虎・豹・羊・鵲なし」と記され、馬の“無”とする記事と一致するようになっているが応神十五年は西暦284年で妥当しないという認識は必要だろう。神功皇后四十年、「魏志にいう。正始元年、建忠校尉梯儁等を遣わして･･･」とあるように『紀』は「神功皇后四十年＝西暦２４０年」とした齟齬がここに影響している。

(3) 鵲（かささぎ）

・推古六年（598）四月条

難波吉士磐金は新羅から返って、鵲（かささぎ）二羽を奉った。それを難波杜に放し飼いにされた。これが木の枝に巣をつくりひなをかえした。

鵲は「北九州に棲む尾の長い白と黒の鳥。ユーラシア大陸の温帯から亜寒帯、北米西部で繁殖する。日本では佐賀平野を中心に、佐賀、長崎、福岡、熊本の４県だけに留鳥として棲息し、この地方では普通に繁殖する」（山渓カラー名鑑『日本の野鳥』551頁より）

上に記したように鵲は、日本では佐賀、長崎、福岡、熊本の４県に棲息するわけであるが、『紀』編纂者はこの鵲を見たことも触れたことも無く、知らなかったようである。放し飼いに出来るような野鳥ではない。又、上の記事からも難波吉士磐金は九州王朝の人物であると言えるし、新羅と倭国の外交は九州王朝（東アジアの視点からは倭国、

これを国内的視点に立てば九州王朝となる）が担っていた。整理すると次表のとおりである。

橘	７１年	有
馬	２８４年	無
牛	５３５年	無
鵲	５９８年	無

牛・馬・鵲は、梯儁の来倭（240年）、張政の来倭（247年）は、帰国する266年以降になっている。このように『紀』は『魏志』倭人伝の記述内容に矛盾しないように散りばめて記述されている。

Ⅱ　天国（あまこく）と高天原

１　国生み神話から

イザナギ神とイナザミ神による国生み説話に、又の名を持つ「天の・・・」がある。次に列記する。

① 隠伎之三子島又の名は「天之忍許呂別」
② 伊伎島又の名は「天比登都柱」
③ 津島又の名は「天之狭手依比売」
④ 大倭豊秋津島又の名は「天御虚空豊秋津根訳」
⑤ 女島又の名は「天一根」
⑥ 知課訶島又の名は「天之忍男」
⑦ 両児島又の名は「天両屋」

六島を生むと記述されているが、上のように七島となっているのは、④の大倭豊秋津島又の名は「天御虚空豊秋津根訳」が後に追加されたからである。この「天（あま）」の名を持つ六島が、天国の領域であって、その中心地が「高天原」である。

「天孫降臨」説話ではニニギ命が高天原から筑紫に天降り、「国譲り」説話では建御雷神が高天原から出雲に天降って、大国主に国譲りを迫っている。この両説話から高天原は筑紫ではなく、又出雲（葦原中国）でもない。伊伎島又の名は「天比登都柱」は壱岐であり、津島又の名は「天之狭手依比売」は対馬であり、この壱岐と対馬の両島が高天原であろう。高天原の高は尊称であり、実質は「天（あま）＝海人」の「原（はら）」である。

この高天原から対馬海流へ、更にその先の黒潮の流れにそって行くと常世国に行き至る。高天原と常世国はかって海流を通して繋がっていた。

ひ ろ ば

生口について一言

名古屋市　石田敬一

前回の例会で佐藤章司氏が発表された生口に関する考察「韓国内陸行と持衰と生口」では、『魏志』倭人伝の記事において、生口は単なる召使いではなく献上品とともに送られていることから、それらの献上品を作る機織りや玉造り等の専門家集団とされた。

『魏志』倭人伝における生口を専門家集団とする可能性を否定はしないが、『三國志』を始め中国史書では、生口は、「匹」や「頭」と数えられる場合もあって牛馬と同じように家畜と同等に取り扱われる。

中国史書では多くが売買の対象となる奴隷や召使い、若しくは戦いで獲得した捕虜と捉えている点を指摘しておきたい。

『三國志』魏書から例をあげる。

１　黄初二年（中華書局版P. 78挾註）

斬首五萬餘級，獲生口十萬，羊一百一十一萬口，牛八萬

戦利品の記事である。生口は羊や牛とともに記され、十万の生口を獲たとされる。

２　青龍三年（中華書局版P. 105）

詔書得以生口年紀、顔色與妻相當者自代，故富者則傾家盡産，貧者舉假貸貰，貴買生口以贖其妻

詔書では、年齢・容貌が妻と同じ位の生口であるならば代わりにすることができるとあり、貧しい者は借金して生口を買い妻の代わりにするとある。つまり、生口は売買の対象である。

ところで、注意していただきたいのは「年紀」は、年暦ではなく、年齢である。

３　王昶（P. 747挾註）

又與人共買生口，各雇八匹。後生口家來贖，時價直六十匹

ほかの人と共同で各々生口を八匹雇う。後に生口を家来として購（あがな）えば、時価は六十匹に値するということでしょう。

生口は売買の対象で「匹」と数えられる。

次に『後漢書』から例をあげる。

１　秉弟・夔（P. 719）

虜遂敗走，追斬千餘級，殺其名王六人，獲穹廬車重千餘兩，馬畜生口甚眾

生口は、馬畜とともに並んで記され、たいへん多く獲られたとある。

捕虜であろう。

２　曾孫・憲(P.814)
獲生口馬牛羊橐駝百餘萬頭
生口は、馬、牛、羊、ラクダと併記され
同等の扱いである。「頭」と数えられる。

３　鮮卑(P.2987)
大破之，斬首千三百級，悉獲其生口牛馬財物
鮮卑から奪った生口、牛、馬、財物は、同等の扱いで、悉く獲るとされる。
なお、生口と財物を一緒に記す記事は『魏志』倭人伝にも「**共顧其生口財物**」とある。持衰に「共にその生口や財物を顧し」とある。これは持衰に新たに生口や財物を与えるという意味ではなく、持衰の持ち物であった生口や財物を戻す（返す）という意味である。
岩波文庫本の現代語訳のように間違って解釈した図書があるので注意を要する。

前回の例会の内容

■ 九州古代史探訪旅行　その３

安城市　山田　裕

肥前国一宮の與止日女神社には白ナマズの石像が鎮座している。古代の呉人は、ナマズをトーテムとする部族であり、このナマズと関わる記事が『後漢書』倭伝の東鯷人の記事である。彼らは、会稽の海を隔てた博多湾沿岸と有明海沿岸に展開した二十余国と推測される。

■ 韓国内陸行と持衰（じさい）と生口

名古屋市　佐藤章司

『魏志』倭人伝における倭国から魏への献上記事では、生口とともに班布や白珠などの献上品が対になっており、生口は単なる召使いではなく献上品を作る機織りや玉造り等の専門家集団と考えられる。また、持衰の描写が詳しいのは、韓国内陸行から倭舟に乗りかえた梯儁が持衰を間近で観察できたからと考える。

■ ハツクニシラス天皇の考察

一宮市　竹嶌正雄

神武の「始馭天下」、崇神の「所知初国」「御肇国」の三つの称号が持つ真の意味は、近畿政権の生い立ちを示しており、三つの称号が一つになって初めて国を建てたことを示している。これらから神武と崇神は同一人物で、近畿政権は崇神より始まったと考える。

■ 「伊豫三島縁起」の古代逸年号

瀬戸市　林　伸禧

『伊豫三島縁起』には古代逸年号が記されている。本家の神社本には古代逸年号（天長）を記されいる文章は存在しない。『群書類従本』始め２本は「天長」であるが、内閣文庫本の内『富士箱根三嶋〔縁起・旧文〕』は「大長」とある。他の２本は「天長・大長」のいずれか確認中である。

■ 『論仏骨表（ろんぶつこつひょう）』の二倍年齢

名古屋市　石田敬一

二倍年齢に関する私の考えは、①中国の堯や殷の時代は二倍年**暦**。②二倍年**暦**は稲作とともに日本列島に移入。③その後中国では天文学の進歩により**普通暦**を採用。④倭は中国の冊封体制下で外交・公式上この**普通暦**を遵守。⑤しかし『魏志』倭人伝は、倭の年齢の数え方は１年で２歳を数える二倍年**齢**と記述。⑦つまり倭は公式上普通暦、国内では二倍年**齢**を使用。⑧継体から普通年暦。
この①の私の考えの裏付け資料として『論仏骨表』を紹介した。

例会の予定など

■ 今月の例会　名古屋市マラソンの当日です！

(1) 日 時　**３月１２日(日)** 13:30～17:00
(2) 場 所
名古屋市市政資料館 第**５**集会室
名古屋市東区白壁1-3、TEL052-953-0051
(3) 参加料　500円　（会員は不要）
(4) 交通機関
・地下鉄名城線「市役所」、東徒歩８分
・名鉄瀬戸線「東大手」、南徒歩５分
・市バス「市政資料館南」、北徒歩５分
・市バス「清水口」、南西徒歩８分
・市バス「市役所」、東徒歩８分
(5) 駐車場　市政資料館：12台＋α収容(無料)

■ 来月以降の例会日　４月９日(日)

■ 次の投稿締切り日　３月２８日(火)

11ポイントでべた打ちしてください。

投稿先：furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp

古田武彦先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻・早退もかまいません。例会で発表する際は資料を**25部**用意ください。

2017年度会員の募集

会員及び会報誌会員には、毎月の例会の資料の配布を始め、次の特典があります。

１　特　　典
・例会参加料無料(欠席時には例会資料を送付)
・会報誌「東海の古代」の配布
・論集「古代への碑」の配布
・友好団体の会報誌の情報提供
２　年 会 費　5,000円（会報誌等送料込み）
３　納入期限　**2017年4月9日(日)**
４　振 込 先
・**金融機関 ： ゆうちょ銀行**
・**名称 ： 古田史学の会・東海**
・**店名 ： 二一八**　　・**店番 ： 218**
・**口座 ： 普通 1299395**
５　問い合わせ
・メール　furuta_tokai@yahoo.co.jp
・電話&FAX 0561-82-2140

募集中!